テルビナフィン難治性の患者検体から *Trichophyton indotineae* を分離した１症例

◎上田 かさね[1)]、河原 菜摘[1)]、壇 怜哉[1)]、瀬筒 彩音[1)]、山口 尚子[1)]、伊藤 達章[1)]
国家公務員共済組合連合会 浜の町病院[1)]

【はじめに】*Trichophyton indotineae* は、2020 年に *T. mentagrophytes/T. interdigitale* の複合群から独立した新種として提案された白癬菌である。今回我々は、テルビナフィン（以下 TBF）内服で難治性だった患者検体から *T. indotineae* を分離した症例を経験したので報告する。

【症例】患者：20 歳代男性。体部白癬で 1 年前より近医 A にて抗真菌剤を外用していたが難治で、近医 B にて TBF 内服に変更した。5 週間内服するも、色素沈着となり完治しなかった。ネイリンに変更し 3 週間内服したが、その後の検査でも真菌鏡検陽性であったため、当院を紹介受診となった。左鼠径部から大腿、右鼠径部にかけて環状の色素沈着を伴う紅斑があり、左鼠径部は擦過による鱗屑が目立っていた。

【細菌学的検査】擦過した皮膚片が提出され、サブロー培地を用いて 25℃で培養したところ、4 日後に白色コロニーが発育した。形態学的に *Trichophyton* 属であることは推測できたが、菌種までは特定できなかった。ITS rRNA 遺伝子解析の結果、*T. indotineae* と同定された（データベース：NCBI BLAST 相同性：100%）。また、帝京大学真菌研究センター加納塁先生にさらなる解析を依頼したところ、薬剤感受性結果は TBF<0.03mg/L、ITCZ<0.25mg/L、RVCZ<0.25 mg/L、LUCZ<0.03 mg/L、EFCZ<0.06 mg/L であり、*SQLE* 遺伝子の変異は認めなかった。

【考察】*Trichophyton indotineae* は伝染性が高く、鼠径部や臀部、体幹、顔面などあらゆる体表部分に感染する。広範囲に炎症を起こし、掻痒を伴う発疹ができるのが特徴である。本菌ではしばしば TBF 耐性株が報告されており、それらの株は *SQLE* 遺伝子に変異があることが確認されている。また、変異がなく TBF 感受性株においても、治療は難渋するとの報告もある。当院では、糸状菌は形態学的に同定を行っているため菌種までは特定できず、ITS rRNA 遺伝子解析で *T. indotineae* と同定された。一般的な検査室では本菌同定に至るのは難しいと思われるが、広範囲に広がった白癬患者で TBF 難治性であるとの臨床情報は、本菌の可能性を考慮する重要なポイントとなる症例であったと考える。

連絡先:092-721-0831